（授業の腕をあげる法則　６章だめな教師の共通点（Ｐ１２４）より抜粋）

（その１）

だめな教師の共通項、それは「子どもができない」「子どもがきちんとしない」ことの責任を他人のせいにすることである。これは顕著な共通性である。

「この子どもができないのは、親に責任があるんだ」「前の担任が悪かったから駄目なのだ。」、この種の愚痴が際限なく続く。

「できない子をできるようにすること」や「きちんとしていない子をきちんとさせること」これこそが教師の仕事なのである。

それが駄目なら責任は教師にある。それを親のせいとにして平然としている教師がいる。聞いた話である。見学に行ったとき、子どもの態度がひどかった。帰ってきた教師は、子どもを叱り親から始末書をとった。ある父親は「自分の子どもの非をわびて、その上で、先生のご指導で何とかならないものだろうか」と書いた。それを見て、その教師は怒ったらしい。教室の中でその子を立たせ、親の手紙を読み上げて「こんな親だから子どもも駄目だ」と言ったという。

聞くだに恐ろしい、身の毛もよだつ実話である。**こういう人は、人間としての基本が駄目なのだ。教師を辞めた方がいいと思う。**

「子どもができないのは教科書が悪い」と、この方面の責任にする人もいる。確かに教科書にも悪いところがある。しかし、それを使って立派に授業をしている人もいる。他の教材を使用して効果をあげている人もいる。

原因の「すべて」を教科書のせいにするのは言い逃れだ。教科書の批判は批判としてきちんとやって、でも、このくらいはできると示していくことも教師の大切な仕事である。（後略）

（その２）

駄目な教師の共通項、それは「教育の情報が狭い」ということである。「本を

読まない」「研究会に参加しない」から当然といえる。身銭を切って専門技量を身につけるということがないのである。全国的に問題になっていることも知らないし、話題の教育書も知らない。これでは教育の情報が入ってくるはずがない。

その結果として教師の方法が我流になる。

たとえば、教室で笛を吹いて子どもたちを静かにさせるような方法をとる。これは教師の技量が極端に低いことの証明なのである。あるいは、子どもにシールを与えて競争心をあおることをする。これなぞ、あれだけ話題のベストセラー「知的好奇心」を読んでいれば、恐ろしくてやれないことである。（後略）

（その３）

駄目な教師の共通項、それは、「主語・述語」がはっきりした文が書けないということである。名文・美文を書けというのではない。ごくごく単純に主語があって述語がある文章、それも正しく対応している文章が書けない。通知表に書いてある文章が何を言っているのかさっぱり分からないという教師もいる。きっと今までに、あまり本も読まず、あまり文章も書かず、あまり辞書も引かないのだろう。

以上のほかにも共通する特徴を持つ。

たとえば、**「研究授業を大変にいやがる」**ということがある。いろいろえらそうな理屈をつけるが、つまりは自分の駄目な授業を同僚に見られたくないのだろう。**「子どもに対する優しさに欠ける」**ということも言える。**「子どもの良い点を話題にしない」**というようなことも言える。まだまだあるが、いやな話しなのでここで終える。